

日常記憶における忘却の認識に関する認知心理学的研究

人間文化学研究科 人間行動論専攻 行動発達論講座

堤 聖月

論文要旨

本論文では、自己の忘却に関する主観的な評価や信念をまとめて「忘却に関する認識」とよんだ。そして、大学生と高齢者を対象とする七つの調査研究を通して、忘却に関する認識の加齢による変化および自伝的記憶との関連について心理学的に検討した。

本論文は全体を通して六つの章から構成される。第 1 章では、忘却の適応的な側面や記憶の自己評価の加齢による変化、自伝的記憶などについて概観し、本研究の目的を示した。第 2 章（研究 1, 研究 2）と第 3 章（研究 3）では、質問紙調査を通して、若齢者の日常生活における忘却に関する認識を明らかにした。第 4 章（研究 4, 研究 5）では、質問紙調査を通して、忘却に関する認識と自伝的記憶の関連を検討した。第 5 章（研究 6, 研究 7）では、質問紙調査と面接調査を通して、若齢者と高齢者の忘却に関する認識の違いを検討した。第 6 章では以上の研究を総括し、本論文の学術的な貢献および今後の展望について述べた。

第 2 章の研究 1 では、日常記憶における忘却に関する認識の特徴を明らかにするために、心理尺度と自由記述を含む質問紙調査を行った。その結果、忘却に関する認識を評定する尺度は「忘却傾向」「忘却統制不能感」「忘却指示性」「忘却感情」の 4 因子から構成されていることが示された。また自由記述から忘却の手記憶的な側面を日常の経験から感じることはあるものの、忘却をコントロールできないという統制不能感の高さが忘却をネガティブなものとして捉える一因となっていることが示唆された。

同じく第 2 章の研究 2 では、忘却に対する統制不能感に注目して、忘却に対する統制不能感と自伝的記憶の特性との関連を検討した。その結果、印象深い出来事としてネガティブな出来事を挙げた群とポジティブな出来事を挙げた群で忘却統制不能感に差はみられなかった。しかし、忘却統制不能感が高い群ほどネガティブで忘れたいと出来事が鮮明に想起されることが示唆された。

第 3 章の研究 3 では、意図的に忘れるために用いる方略を忘却方略と呼び、個人が日常生活で用いている忘却方略の使用頻度とその効力感について検討した。その結果、使用頻度では、考えないようにするなどの認知的忘却方略のほうが高かった。一方で、効力感につい

では、人に話すなどの行動的忘却方略のほうが高く、忘れたと思った際の方略の使用頻度と効力感の間にはずれがあることが示唆された。

第 4 章の研究 4 では、経験したことをいつか忘れてしまうだろうという見通しに伴う抵抗感や不安感などの意思、感情を「忘却への懸念」と呼び、忘却への懸念と自伝的推論やアイデンティティとの関連を検討した。その結果、忘却への懸念は 1 因子構造であることが確認された。また、忘却への懸念は、アイデンティティの確立と関連することが示唆された。

同じく第 4 章の研究 5 では、特定の出来事の忘却への懸念が自伝的記憶の特性とどのように関連するのかを検討した。その結果、想起された出来事の重要性は忘却への懸念に影響を与えていたが、自己象徴性は忘却への懸念に影響を与えていなかった。

第 5 章の研究 6 では、高齢者における忘却に関する認識を面接調査から探索的に検討した。高齢者は、「忘れることはあまり良くないと思うけど」といったような前置きがなされる場合もあったが、総じて必要な精神機能であると概ね肯定的に語っていた。外的記憶方略について語るが多く、予定や約束といった展望記憶の失敗を避けようとする傾向がある一方で、忘却を自然現象ととらえており意図的に統制しようとはしない傾向があることが示唆された。

同じく第 5 章の研究 7 では、研究 1 で作成された忘却に関する認識尺度が高齢者に適用可能かを確認するとともに、若齢者と高齢者の結果を比較することで、高齢者のもつ忘却に関する認識の特徴を検討した。その結果、若齢者と高齢者では忘却に関する認識が異なる可能性が示唆された。特に高齢者のもつ忘却に関する認識の特徴として、加齢による一般的な現象として受容的な見方をしていることが示された。

本論文は、以上の七つの研究を通して、日常記憶における忘却の認識について次のような貢献を果たした。第一に、心理尺度に加えて自由記述形式による質問紙調査と面接調査を用いて、日常記憶における忘却の認識の特徴を新たに示した。第二に、自伝的記憶に対する忘却への懸念尺度を開発し、自伝的記憶と自己との関連を忘却の観点から検討した。第三に、従来の自伝的記憶研究では検討されてこなかった、個人が「忘れたくない」と評価している記憶の特性に関する知見を新たに提供した。第四に、若齢者と高齢者の忘却に関する認識を比較することで加齢による変化を示し、記憶活動の面から高齢者の精神的健康を支援するための知見を提供した。

氏 名：堤 聖月

学籍番号：9516102

論文題目：日常記憶における忘却の認識に関する認知心理学的研究

学 位 名：博士（人間文化学）

学位取得日：2021年9月16日

指導教員：清水 寛之（神戸学院大学心理学部教授）

主 査：長谷川 千洋（神戸学院大学心理学部教授）

副 査：早木 仁成（神戸学院大学人文学部教授）

副 査：村井 佳比子（神戸学院大学心理学部准教授）

副 査：清水 寛之（神戸学院大学心理学部教授）

副 査：佐藤 浩一（群馬大学大学院教育学研究科教授）